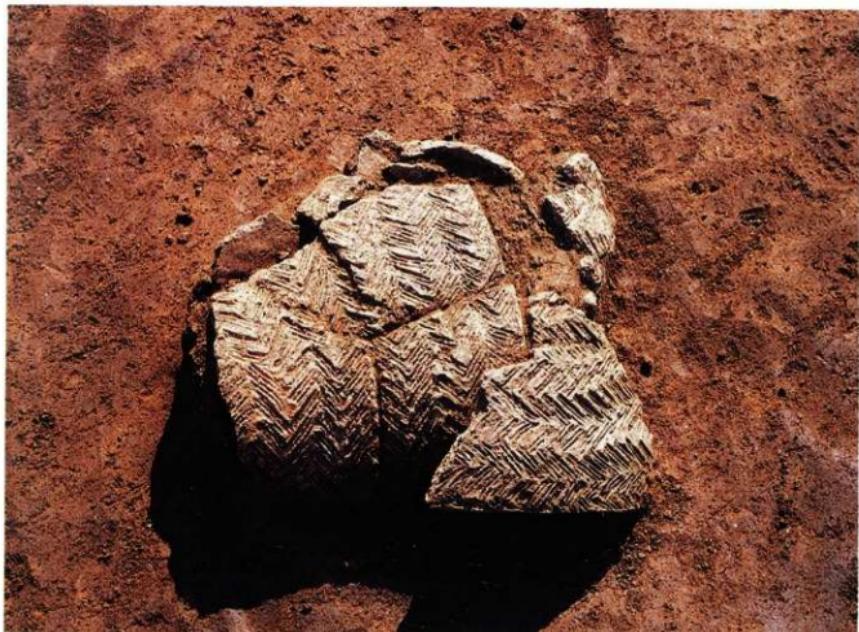


お ひら なら はら
尾 平 ・ 楠 原 遺 跡

県営特殊農地保全整備事業中尾地区（楠原工区）に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 概 要 報 告 書



1995.3

宮 崎 県 教 育 委 員 会

序

本書は、清武町と田野町にまたがる中尾地区で進められている県営特殊農地保全整備事業に伴い、本年度事業地の檍原工区で実施した尾平・檍原遺跡の発掘調査概要報告書です。

調査の結果、縄文時代早期の縄群、集石造構や古墳時代の堅穴住居跡が検出されそれに伴い、完形の縄文土器や土師器、石器などの良好な資料が多数出土しております。

近年、南九州の縄文時代と古墳時代研究は全国的な関心を集めているところであります。本書がそれらの進展に寄与する学術資料として、あるいは学校教育、社会教育の資料として広く活用され、先人の残した文化遺産である埋蔵文化財の保護への理解につながれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御協力をいただきました、檍原換地委員の方々をはじめとする地元の皆様に対し、心より厚く御礼申しあげます。

平成7年3月

宮崎県教育委員会

教育長 田 原 直 廣

凡 例

1. 本書は、県営特殊農地保全整備事業中尾地区（檜原工区）に伴う、尾平・檜原遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教 育 長	田原 直廣
文 化 課 長	江崎 富治
課 長 補 佐	田中 雅文
庶 務 係 長	高山 恵元
埋 藏 文 化 財	
第 二 係 長	面高 哲郎
同 上 主 事	吉本 正典（調査担当）
調査員(嘱託)	鎌田 次郎（平成7年1月6日まで）
同 上	井田 篤（平成7年1月9日から）

3. 本書で使用した上空からの写真の撮影は、株式会社スカイサーバイに委託した。
4. 本書の編集・執筆は吉本が行った。

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第Ⅱ章 調査の概要	1
1. 遺跡の位置と環境	1
2. 調査の記録	2
第Ⅲ章 まとめにかえて	7

第Ⅰ章 はじめに

中尾地区の県営特殊農地保全整備事業は昭和48年度から平成8年度までの予定で約208haの面積を対象には場整備を行うものである。この地域は清武町と田野町の2町にまたがるため、平成6年度の工事地域内の埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関と宮崎県教育委員会で協議を行った。その結果、県教育委員会が主体となって発掘調査を行うことになった。発掘調査は平成6年11月9日から平成7年1月23日までの期間実施している。

第Ⅱ章 調査の概要

1. 遺跡の位置と環境

尾平・榎原遺跡は、宮崎郡清武町大字今泉甲と田野町尾平にまたがる台地（いわゆるシラス台地。標高約118m）上に立地している。北緯 $31^{\circ} 50' 90''$ 東経 $131^{\circ} 20'$ 付近に位置する。同年度に発掘調査を実施した上の原第2遺跡・第3遺跡は、本遺跡の北東約4.3kmの位置にあたる。近辺には、縄文時代の各時期の遺跡が所在していると見られる。特に早期の遺跡は多く、田野町側の前平遺跡群や二ツ山遺跡などでおびただしい数の集石構造や土抗、貝殻文筒形土器や押型文系土器が出土している。また古墳時代では、当地域の在地墓制である地下式横穴2基が、田野町灰ヶ野で確認されており、蛇行剣などが出土している。いずれも平入り（羨道が長側壁に付く）形態で、古墳時代後期後半に位置づけられている。

（註）

- 田野町教育委員会 「芳ヶ迫第1遺跡 札ノ元遺跡 他」『田野町文化財調査報告書第3集』1986
- 田野町教育委員会 「二ツ山第1遺跡」『田野町文化財調査報告書第13集』1992
- 田野町教育委員会 「二ツ山第3遺跡」『田野町文化財調査報告書第15集』1992
- 石川恒太郎 「田野町灰ヶ野地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書17集』1973



2. 調査の記録

調査に際して、まず耕作土（I層）を除去し、施工予定の水路のセンターラインに平行する基線（N-20°-Eの方向）を定め、10mグリッドを設定した。実掘面積は4,550m²である。

基本層序は写真3に見られる通りで、Ⅲ層としたアカホヤ層が全面に見られる。主要な文化層は2枚で、一つはアカホヤ層の上面で検出した古墳時代の遺構、もう一つはアカホヤ層より下位のⅣ層とV層の層界付近で検出された縄文時代早期の遺構・遺物がその内容である。その他、部分的に見られるアカホヤ層の二次堆積層からも、少量ながら遺物が出土している。

以下、時代順に、主な遺構と遺物について触れていく。



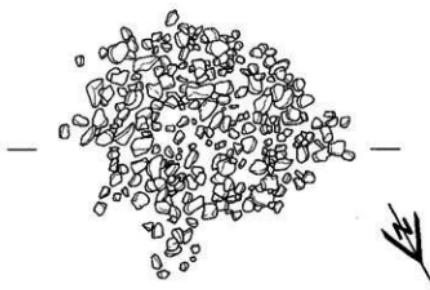
写真1 調査区全景(上空より)

縄文時代早期

前述の通り、IV層とV層の層界の不整合面（IV層土とV層土が混じるところ。10cm～15cm程の厚さがある）辺りのレベルで、2か所の礫群と3基の集石遺構（下部に掘り込みを持ち、礫の密度の度合いがより大きい）が確認され、貝殻文円筒形土器の桑ノ丸式や押型文系土器、石鎌やチップ（黒曜石製のものが多い）などが出土している。

ただしこの文化層については、当初その存在を予想してなかったこともあり、礫群周辺部分と要所に入れたトレンチ部分しか調査を成し得なかった。トレンチによる探査では、調査区の南側においてはほとんど遺物が出土しておらず、礫群周辺部とそれに続く調査区北東隅以外は密度が著しく低いものと推測している。

なお、1号礫群の中には少なくとも6か所の礫集中部分、すなわち集石遺構が含まれている。集石遺構のあるところにはほとんど黒褐色土の落ち込みが認められる。そのうちの何基かは、下部にかなり深い掘り込みを有するようである。



1. 黒褐色土層/バミス含
2. オリーブ褐色土炭化物含

図2 1号礫群内集石実測図(1/25)

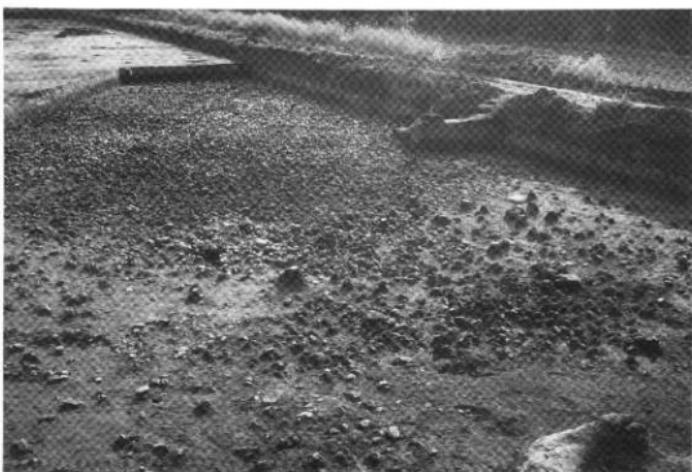


写真2 1号砾群(北東より)



写真3 1号砾群検出状況(南より)



写真4 2号集石(南西より)



写真5 3号集石(北西より)

古墳時代

竪穴住居跡が1基検出されている。小形に属する住居で、柱穴は2基認められ、壁帶溝を巡らせる。突帯を施し口縁部が直になる甕などの出土土器の特徴から、古墳時代後期の所産と考えられる。



写真6 1号住居跡覆土の状況

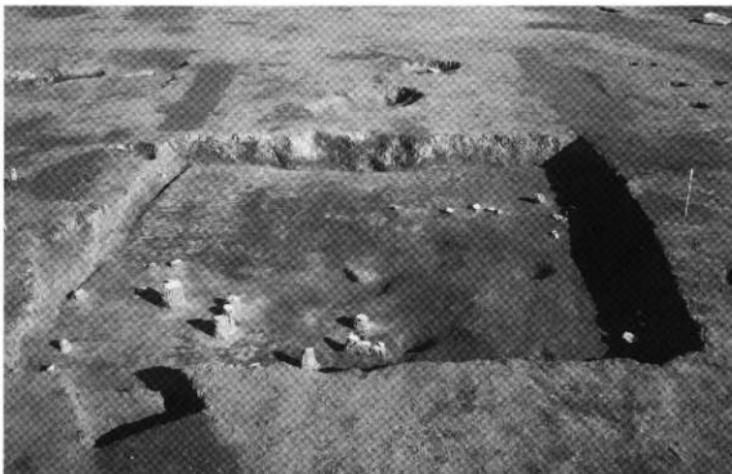


写真7 1号住居跡(南西より)

第Ⅲ章　まとめにかえて

ここで、今回確認できた遺構・遺物およびその時代についての問題点を簡単に整理しておきたい。

縄文時代早期の疊群・集石遺構には、全体では想像もつかないほどの数の疊が用いられており、しかもそれが500m²程の範囲に集中している点は特筆されよう。特に1号疊群は、当初は廃棄疊の集積と考えていたが、集石遺構を数基含むことや、場所によって疊の様子（大きさや割れ具合）が違うことなどから、疊の準備→加熱→使用→廃棄といった遺構構築のサイクルの現出である可能性が考えられる。また疊に混じって、あるいはその周囲から出土している土器は、ほとんどが貝殻文円筒形土器の桑ノ丸式や押型文系土器（縦方向施文）であり、比較的短期間に形成された、単一の文化層と認められよう。桑ノ丸式と縦方向施文の押型文系土器（下背生B式）が共伴するすれば、柔畠光博・上田耕・雨宮瑞生による想定の確認例の一つとなり、さらに前述の疊群・集石遺構に縄文時代早期中葉の定点が与えられることになる。

1基のみ単独で検出された古墳時代の竪穴住居跡は、時代的に地下式横穴を築いた衆団との関連を想定せねばならない。地元の方への聞き取り調査によれば、調査区の南側の畠地で遺物を探集しているとのことであり、該期の遺構はそちらの方向に分布域が広がっているものと推測される。

以上、発掘現場での所見をもとにまとめてみた。今後、それらの解決のために遺物やその出土状況などの詳細な検討を行っていきたい。

(註)

1. 柔畠光博・上田耕・雨宮瑞生 1993 「貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係－宮崎・鹿児島両県における出土状況の検討－」『南九州縄文通信』 南九州縄文研究会

尾平・檜原遺跡

県営特殊農地保全整備事業中尾地区（檜原工区）に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 概 要 報 告 書

1995年3月

編集・発行 宮崎県教育委員会
印 刷 藤屋写真印刷株式社